

あを 10

2008



目黒自然教育園

敬老金もらひてひとりどせう屋に
美子一

敬老金もらひてひとりどせう屋に 瀧春一

あを

十 月



食卓

梅干の蓋ずれてゐる扇風機
秋すだれキャビアの蓋に苦闘せる
早蛭や急須の蓋の位置整す
カップ麺にあてがふ文庫歳時記秋
十二月七味の蓋の遠まはり

本三宮前

佐藤喜孝

茅花咲く野原を過ぎて九十九里
正確に岩叩きをり卯月波
田草取る人を見てゐる坐る牛
放牛の好みし向きや夏の草
茱萸熟るる焚物小屋に鶏出入り

本三宮前

鈴木多枝子

あをぎり

浦和 竹内弘子

霧雨や草に転びて大事なし
ひとにぎりほど焚き増えしむかご飯
土間すこし汚して燕かへりけり
青桐に音たてて雨ふりつづく
男子あり蛙の王と称へらる

米 櫃

田端 田中藤穂

炎天来てコロの森の深緑
米櫃に米あり敗戦日の正午
雷雲や岩の蔭から啼兎
諳ずる奥の細道今朝の秋
老懶か風邪の名残りか蓼の花

祭

法被の背祭団扇をぐいと挿し
佃煮の元祖てふ店汗の人
車座の赤銅の背夕焼くる
「浜長」に草履も靴も祭かな
祭満つ躊躇してをる夕日かな

白金 東 亜 未

炎

炎帝の統治おそろし栄養剤
喜雨来たりいきほひ余り水攻に
セピア色にしてはいけない敗戦日
盆の月兎さんまだ居れますか
童歌童話も遠く盆の月

四日市 長崎桂子

さいたま

早崎泰江

病院を出て目にしみる緑かな
着々と青き稲穂の撓み初む
暑からふ屋根に鴉の下りるなり
えご小櫛くぬぎの林蝉時雨
かなかなに誘はれてつい遠出する

富士

新宿

堀内一郎

永眠を告げずに居りし敬老日
一人去り二人去りたる小鳥来る
雲に入り霧を出て濃し草もみぢ
富士九月バス一台の重さかな
あへぎきて富士五合目の秋の蝶

新宿 森山のりこ

夏料理はからず祝ふバースデー
束の間をホテルに憩ふ作り淹
息災を喜び集ふ鮎料理
涼しさや旅の栞に山の風
白桃のしたたり久に姑思ふ

地平線

上高田 森理和

ひまはりは皆俯きて地平線
入道雲電力風車十三基
大夕焼旅行半ばのドレスデン
馬鈴薯が大皿に居座つてをる
緑陰に遺されしベルリンの壁

猫が居て犬立ちどまる夏の朝
冷やし瓜家族揃ひて写真かな
朝早きパン屋の戸口蟬の殻
コスモスの花びらかぞふ朝の原
黄コスモスどうぞと種の置かれをり

見沼 山莊慶子

那須高原

高原の古き蕎麦屋の酔芙蓉
空の色深めて蜻蛉ふえにけり
赤とんぼ園の芝生に群なして
ロッジの径みんみん蝉と風音と
稲妻に一瞬闇の動きたる

本三西 吉成美代子

本三宮前

吉弘恭子

夏草の花になりきる百日紅
夏空や泰山木に花のあと
木蓮^{きはちす}のちぢみて道の花となる
猫じやらし揺れてすずしき風のなか
夕星^づやあえか棟の褪せし色

船 虫

鹿手袋

渡邊友七

船虫の巖剥ぐごとく群れて逃ぐ
夕さればむらさき深し秋の嶽
妻責めし悔いのふくらむ夜の蟬
地の底に啼くこほろぎや税重し
あめんぼや音なくゆくは門の川

北京五輪

清瀬 赤座典子

秋海棠口パク少女と言はれても
流星や小国の得し金メダル
鶏頭や力出し切るアスリート
秋天や総じて凜凜し日本女子
国威とは厄介なもの遠花火

桜ヶ丘 安部里子

稲光次の番かも死んだふり
秋めいてつぶやき聞ゆ兵馬俑
声かけて秋の蟬とる烏二羽
秋曇血圧だけをほめられぬ
秋日とお代千円猫カフェ

身に入む

向島 遠藤 実

身に入むやざんざん雨の忠魂碑
天高し蟹工船の本の山
かなかなや養老院の早夕餉
戦ありて二夫にまみえし野菊白
繰言がありても無くともはや残暑

春雨のそば降る日、義母と妻を伴って唐招提寺を訪ふ

名古屋 王 岩

梅白し和上の結ぶ誼かな
春雨や和上を偲ぶ故郷の人
花の雨和上の遺徳偲びけり
故郷の瓊花にほへる御影堂
中国揚州の瓊花は御影堂の庭に植う
雨濡つ御影堂ゆかし春霞

逗子 鎌倉喜久恵

流燈や浜に読経の広がりぬ
精霊船茜を残す海に消ゆ
無花果の店頭に出て母のこと
掃苔や花となりたる母なりし
白玉は白砂糖でとははごのみ

独居

川崎 木村茂登子

家主わが八月生れ獅子座なり
新涼のマイバス・キッチン・マイトイレ
方丈の二間くまなく秋灯
蜘蛛の巣もひそみゐるらし我が古巢
狗尾草は踊り上手よ抜かずおく

ぜんまいの切れさうな蟬静まりぬ
空蟬や著莪の葉しかとつかみをり
ひと回りシルエツトで捜す油蟬
空蟬のあまた揺れをり一本百合
誉められて嬉しき事あり茄子の花

白金 齊藤裕子

老衰は楽さうに見ゆ窓の月
生身魂慌ててズボン穿きにけり
浜木綿も昭和の家も濡れてゐる
新涼の川の芥に夏みかん
エレベーター乗りあはす蚊と目の合ひぬ

銀座 篠田純子

千駄木

芝 尚子

生は死と同じ数だけ蟬の穴
いくさ経し人ばかりなり心太
人住まぬテラスハウスのカンナの黄
冷まじや廃墟の中の百日紅
朝顔の紺のいち輪終戦日

八月六日

宝泉寺前

芝宮須磨子

暗闇に固まってゐた八月六日
落日が眞つ赤に光り灼けるビル
誰彼も黄泉の人なり盂蘭盆会
暮れ泥む無人の校庭蟬時雨
岩波辞書捲りながらにアイスティー

本 質

尺蠖の歩行は本質的であり
ビアホール枝豆がひとつ生煮え
炭をつぐこと炎昼の鍛冶やかな
旱天へ開き日傘の先尖る
新聞が開きっぱなし夕凧ぎて

輪
島

定梶じょう

靴脱げばポロリと落ちし血吸蛭
J U D O に金メダル八月十五日
小さき手しっかり握り夏まつり
白シャツや矢沢永吉永遠に
行く夏を渋谷で映画夕茜

須賀敏子

立秋のくるくる回るカバの耳
 佃では無縁仏も踊の輪
 どの顔も風を楽しむ花菖蒲
 掛声のいっそ淋しき踊かな
 こんなところに浦島伝説夏の雲
 手の力脱けて踊の膝と足
 滴りをふくみて苔の窮まれり
 私にも百歳の夢夏ゆくや
 思ひ出も共に消え去る遠花火
 若竹や真空パツクのやうな路
 朝顔の一輪まじり大野原
 濃淡の緑揺れ合ふ夏の湖

佐藤喜孝
 須賀敏子
 鈴木多枝子
 竹内弘子
 田中藤穂
 東亜未
 長崎桂子
 堀内一郎
 森山のりこ
 森理和
 山莊慶子
 吉成美代子



前月作品

余所者にわからぬやうに濃あぢさゐ
 送り火に溝の明からむ母の国
 髪切りて水羊羹を玻璃の皿
 熱風の坂登り来て一息す
 鴉居て片足上げる草いきれ
 あいさつの姿よき人半夏生
 手をつなぐ母子の姿風鈴市
 心做し大きくなりて墓
 いつくしみの広がってゆく天花粉
 七月や足おぼつかな腕を振る
 みすずかる信濃は夏と恋文に
 一日ぢゅう雨のビニール簾かな

吉弘恭子
 渡邊友七
 赤座典子
 安部里子
 遠藤実
 鎌倉喜久恵
 木村茂登子
 齊藤裕子
 篠田純子
 芝尚子
 芝宮須磨子
 定梶じょう

喜孝 抄



九月作品より

田中藤穂・佐藤喜孝

立秋のくるくる回るカバの耳

佐藤喜孝

作者の五句は、先月からの動物園シリーズの続きです。私は残念ながら、吟行に伺えなかったので河馬にもペリカンにも何年来ご無沙汰のままである。しかしまあ、創造の神はよくもこんなにいるいろの獣や鳥魚、虫などを考えて造ったものだ。さすがに全能の神である。

辞書によると、河馬は牛目^{しめ}だそうだ。体重は二トンから三トン。日中は耳と目と鼻孔だけ水面に出して休息しているのだそうです。象や驢馬や兎などに比べて、あの巨体にしては小さな耳である。けれどその小さな耳に神経を集中して、立秋の世間に注意を払っているのだろう。河馬も猛暑の夏をどうやらしのいで、やっと訪れた立秋にほっとしているのか、いや、河馬の故郷はアフリカなのだから、暑さにばてるのは

人間だけで、河馬は案外平気で人間を不思議がっているかもしれない。

佃では無縁仏も踊の輪

須賀敏子

七月十五日に「あを」で吟行した佃島の盆踊の句。私もはじめてで、浴衣掛けの地元の方々のあとについていて、盆踊会場の広場へ着いた時、ふっと異界へ入った気がしました。というのは、もう輪になって踊っている人達が頭上に上げた手が何やらくにやくにやしていて、この世の人の様に思えなかったからです。

干網のような形に吊りおろされた細長い提灯はみな真つ白で、南無阿弥陀仏と墨書されている。風の中に線香の香が漂っている。高く組んだ櫓の上に大太鼓が一つ置かれ、単調に叩きつづけられている。マイクから流れる盆唄は古老の美声、でもその盆唄も声明のような、哀調を

帯びて夜空に響く。私が幼かった頃流行った東京音頭の盆踊の賑やかさ華やかさは、全然ちがったものであった。

「佃では」と句を書き出していますが、「佃島」とした方が句格が高くなると思います。

掛声のいっそ淋しき踊かな

竹内弘子

あたらしき葭簀に囲ふ無縁仏

お線香の匂いは、盆踊の広場の、隅田川の土手を背にした一面に、新しい葭簀に囲われた無縁仏のための魂棚からだった。大勢の人がお簀錢を上げては、香やお線香を絶えまなく上げていた。佃島の盆踊は、もとは明暦の大火につながつているのだから無縁の仏様にもさまざまな謂れもあることだろうが、こうして無縁の仏様も供養しながらの盆踊は、本当に本来の盆踊の姿だと感銘した。

もしや父に押され念仏踊かな

東 亜 未

「あを」の仲間で、東亜未さんだけが踊の輪に加わった。この句を見ると、お父さんが押してくれたような気持がして、というようである。きつと東亜未さんはお父さんと一緒に踊っているようだったのでしよう。あとで伺ったことですが、祭半纏を着た世話役の小父さん達が踊り方の指導もしてくれて、手つきは、はつきり綺麗にしてはいけないといわれたとの事、やはりあれば他人に見せるための踊ではなくて、純粹に祖先の霊を慰めるための踊なのだと痛感しました。

踊の輪の中には白塗りの狐や猫の顔の人もありました。敏子さんの句のように、あの踊の輪の中には、確かに、お盆であの世から戻ってきた有縁無縁の霊も加わっていたと思います。

若竹の小路ふはふは人力車

森 理 和

出てきた筍はどんどん成長して、やがて皮を落して若竹となり、みずみずしい柔らかな葉をつけて、あたりを緑の世界にする。その若竹が

ずっと続いている小路を、理和さんは、人力車で行かれたのでしょうか。真赤な毛布を膝に掛けて……ふはふは、が若竹の柔らかな葉のそよぐ道の気持よさと、そこを人力車に乗ってゆく楽しい気持をよく表していて、夢の世界のようですね。

髪切って水羊羹を玻璃の皿

赤座典子

何とも涼しげな一句です。今年の夏の猛暑を爽やかに乗り切った典子さんの若さに脱帽します。

日は中天前も後もなき酷暑

鎌倉喜久恵

こちらはまた、今年のどうしようもなかった暑さを、前も後もなき、という言葉で見事に表現しました。中部以西や九州などは東京よりもっともつと暑い日が続いたようで、来年の夏はどうなるのでしょうか、夏に弱い私はいまから案じています。

片陰のすぽーんと消えし再開発

斉藤裕子

再開発ということ、いままであった建物や並木や商店街などが、急に失くなってしまふところがある。日を避けようにも、涼もうにも片陰というものがなくなってしまったのだ。思いがけない急激な変貌への驚きの気持を、すぽーんと消えて”の語が実によく表している。

賞味期限切れなどは無しサンドレス 篠田純子

純子さんは銀座にお住いですが、いつも颯爽と自転車に乗って活動しておられる。

句会の度に、独特の今風の服装で、眼を楽しませてくださる。去年お孫さんが生れておばあちゃまなのだけれど、そんな感じは微塵もなく、勿論サンドレスもよく似合う。純子さんには賞味期限切れなどは無いのです。後期高齢者の私にとつては、羨ましくもまた、限りなく頼もしい存在です。

七月や足おぼつか腕を振る

芝 尚子

七月も初めのうちはまだ梅雨が明けなくて、はじめと不快な日が続く。と思うと急に暑さがきたりして、体調を合わせるのがとてもむづかしい。

よく人は足から老いるとは聞いていたけれど、私も近頃しみじみとその言葉を実感している。足がおぼつかないと、バランスをとろうとして自然に腕を振るので、尚子さんはそれを正直に句にされている。

よく見るとこの句は哀感がありながらどこかに可笑しみも感じる。尚子さんは江戸っ子なので、何か嘆くときも、しゃきつとしていてじめじめしない。好きなのところです。

(以上 田中藤穂)

私にも百歳の夢夏ゆくや

堀内 一郎

一郎さんは何歳になられたのだらうか。ただ百歳をむかへるのが夢といふことではないだら

う。百歳になつたときにどんな夢を描いてゐるのだらうか。痛快とも思へる句である。計り知れない生きる力を秘めた作者。今年の過酷な夏の暑さをなんなく越したエネルギーに敬服する。

送り火に溝の明からむ母の国

渡邊 友七

迎火送火と母と一緒に道端にかがんでしたことをうつすらと思ひ出す。夕暮の中、迎火にほつと浮かびあがる溝の中。印象的な光景である。「母の国」は作者らしく云ひたいことを云ひ得てゐるのだが、一考をのぞみたいところでもある。

一日ぢゅう雨のビニール簾かな

定梶 じょう

きはめてさびしい句。凡なる景の中の「ビニール簾」が象徴的。

ととるのは偏つてゐるのだらうか。竹簾よりビニール簾の方が色あざやかで明るい、といふ見方もある。しかし私にはさうしか読めなかつた。

(以上 佐藤喜孝)

善福寺川緑地

田中藤穂

新涼の大樹に木札「落羽松」
らくうしょう

沼杉の丸き実たわわ雨涼し

両岸は緑陰橋より川覗く

初秋の川ここからは真っすぐに

もつれぬる夏のをはりの白き蝶

集合は百日紅の花の下

青桑に手触れて父の村のこと

空家みな板打ちつけて晩夏の雨

草いきれブランコ庭に錆びしまま

空蟬に遠く旺んな蟬の声

楔櫃の実カーテンを洩るピアノ曲

花散らす白さるすべりバスを待つ

風涼し区内を廻る小さなバス

近世俳諧と漢詩文〜拾弐

王岩

雲想衣裳花想容

厚着して姿を見する牡丹哉

紀逸

紀逸は元禄八年（一六九五）〜宝暦十二年（一七六二）で、本名は椎名件人である。別号に四時庵・研田舎などがある。問題の句は石霜庵二世紀逸編『夏つくば』（元文二年自序）に見える。句前の詩句は李白「清平調詞 其一」の起句である。

雲想衣裳花想容、雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ

春風払檻露華濃。春風 檻を払つて露華濃かなり

若非群玉山頭見、若し群玉山頭に見るにあらずんば

会向瑤台月下逢。会ず瑤台月下に向つて逢はん

李白「清平調詞 三首」は『唐詩選』に載る。いずれも、唐玄宗が実質的な正宮であつた興慶宮の中の沈香亭で楊貴妃と共に牡丹の開花を愛でて遊宴した際、李白に命じて詠ませたもので、当時の名歌手李龜年は歌つたと伝えられている。

雲を見れば楊貴妃の美しい衣装が目につかび、花を眺めれば、楊貴妃の美貌が連想される。春風は沈香亭の欄干を優しく吹き抜け、牡丹をしと濡らす露は艶やかに光る。楊貴妃ほどの美人は人間界になく、西王母の住む群玉山の上で見かけるのでなければ、仙人のいる瑤台の月明りのもとでしか巡り合えないであろう。「清平調詞 其一」は、楊貴妃を春風の中で艶やかに咲く牡丹に類えて謳いあげた。

紀逸が「雲想衣裳花想容」を句題にして詠んだ「厚着して姿を見する牡丹哉」は、漢詩の優雅な描写から、ふくよかに咲く牡丹の花を俳諧味豊かに詠んでいる。幾重にも重ねた牡丹の花弁は丸で厚着をした姿のように見えるか、或いは「厚着して」という上五が牡丹を擬人化した描写と取るならば、楊貴妃の故事とを考え合わせて、美しく着飾った牡丹花のような絢爛を誇る遊女のイメージを連想したのかもしれない。

慶紀逸

うき草や動かずに居る冷し馬
鶯の声かけて割る氷かな
二夜啼くひと夜は寒しきりぎりす
ほたほとと桃の花さく垣根かな
賀になる人美しき師走かな
敷入のうき世に飽た顔もなし
起出て又何事をいとなまむ
起々の筆にちからや大根引
玉霞鼠の姫を呼ふ夜かな
山茶花や障子のうちに尼の聲
鳥さしの振かへりたるやなきかな
枕久か蒔て花さく菜種かな
年と日のかゝりむす子や太郎月
田作りの鱸ハ寒し梅の花
万歳や今ハむかしの縣あがためし召
神農
一日の口に余るを蚊やりかな
はつ霜や湯屋よりあまる水煙

風はなやねふかに落て入性根
秋までハ我を張通すかゝし哉
述懷

鬼灯や人ハ口から年か寄り
樽買の二十日めに来る牡丹哉
降そうな三十日をふらて時雨かな
袴着やうしろにおやま二良三郎
鼠追ふ夫婦の声も夜寒哉
木からしや眼につけて吹柳原
あたゝかに猫を寐せるや寒牡丹
酔ぬとハ言れぬ雛のあくらかな
鹿の恋猶焚つけるもみち哉
神明法樂

正直の種を植るや杉の苗
初午に狐を乗せる遊びかな
根を付て提れハいやし菊の花
海老網の引明ひきあけさむきもみち哉
五月雨や焚ぬ煙の小袞はら
二日から月も匂ふや梅のはな

特別作品鑑賞 佃 島 篠田 純子



佐藤 喜孝

魂棚のお鈴の湿る佃島

「前月号鑑賞」で藤穂さんが佃島吟行句を懇切に採り上げてをられる。本当にそれぞれ印象的な俳句を得られたとおもふ。「お鈴」は「おりん」と読む。仏壇に座布団を敷き乗っかってゐる金色の仏具。おなじみ過ぎて改めて調べるとどの字をあてがってよいか分らない。「鈴」ではスズにも読めてオリンらしくない。ある人が「鈴」といふ字がそれだと教へていただいた。分厚い仏語辞典で調べたり、大漢和辞典を開いたがこの漢字は見つからなかった。この句が表すやうに佃島は本来の盆踊なのだろう。辞書によると「盆に迎えた精霊を送り返す行事」「精霊を迎え慰める」と二様ある。どちらも大切。「夜釣する人の背中に盆太鼓」「盆の月狐の唄ふなむあみだ」「ざっぱんざっぱん舟すれ違ふ盆の月」にも触れたいが紙数が足りない。乞ご寛恕。

あをかき集

竹内弘子選

(六人目以降五十音順)

近近きんきんのあぢさゐ遠の青信号

吉弘 恭子

袋地を通り過ぎたる梔子の花

夏の月澄み瀬枕の見え隠れ

枕香に深眠りする猫の足

合歡の花枕返しといふ謂れ

今日生れて永き夢見し蟬の鳴く

芝 尚子

夏の果てゴリラ胸毛の白きもの

飲み残す葉いろいろ夜の秋

湯浴みして身は新涼をまとひけり

星月夜髪ととのへてポストまで

蓮の花月光軽ろく軽ろくなり

渡邊 友七

おふくろの名の墓小さし萩の花

白蓮にはつしと止まる暑さかな

惜命の一灯消ゆる青田風

晩夏光頭に生涯の蟬声や

兄弟のことば少なに墓洗ふ

吉成美代子

思ひ出の中に姉をり百目紅

屈斜路湖夏うぐひすのしきり鳴く

早起きの蟹の横切る崩れ梁

鎌倉喜久恵

鮎焼く火皺深き顔照し出す

鯊日和置竿ならぶ釣敵

青蛙手のひら蹴つて草へ跳ぶ

蟬の殻葉裏にすぎり夏を越す

鉄錆びた昭和の団地さるすべり

篠田 純子

真上から覗き込む川涼新た

噴水や鴉の喝と赤き喉

生身魂曾孫としばし見詰めあふ

秋の蟬紅茶待つ間の砂時計

日焼また眩し娘の帰国かな

大野原とんぼの国に来たること

給水塔の傾きて見ゆ秋涼し

檀子の実垣より拳突出せり

寄植に馴染んでをらず吾亦紅

ゲリラ豪雨と呼ばれしほどの秋出水

終戦日喜怒哀楽の解放さる

サン格拉斯悪女の気分顎上げて

枝豆のどこの国から同じ顔

図書館の置き引き注意盆休

白桃や白磁の皿も香りたる

残暑いま終る形を模索せる

妻欲しと妻が云ひきる秋うらら

打水や濡れた音して下駄の女

鰻重を待つてゐる間の冷酒かな

夏草の跋扈更地を狭めゆく

藍いよよ深くなりゆく浴衣かな

出囃子はどろどろどんと夏の寄席

赤座 典子

安部 里子

遠藤 実

木村茂登子

打水が撥ね会葬の花環かな

ひとりっ子あつめる蟬の殻ばかり

みな留守のなげだしてある蠅叩

陶枕や宿直室にありしこと

その時はその時と決め敬老の日

タオルケット肩までかけて今朝の秋

予定表に書き足す太字秋の旅

一人の卓トマトを添へてはなやぎぬ

サンバイザー深く被りて擦れ違ふ

雷鳴を遠くに聞きつ髪染める

向日葵を脚立に乗つて撮す人

御岳山蓮華升麻は下を向く

サーフアーの消えては現るる卯月波

騒音に負けまいと蝉鳴きつづけ

一棹にぐいと近づく花菖蒲

迎火を焚きてお客のありしごと

夏祭銀座天國^{くに}空いてをり

夜遊びの猫の鈴の音蚊遣香

定梶じょう

芝宮須磨子

須賀 敏子

鈴木多枝子

田中 藤穂

降りかけて逸れし夕立鴉くる

集配夫凌霄の花ほめてゆく

不可解は人居ぬ団地百日紅

大胆に己が皮削ぐ百日紅

空蟬や離れまいぞの爪の先

荔枝糸瓜朝顔胡瓜窓に八重

湿気多き昼の蚊たたき血の滲む

大雨の窓に張付く蜥蜴の子

夕蟬の終りも間近きとぎれつつ

疾走のバイクが蟬の殻とばす

地震の地に源氏蛩の飛ぶとやら

この夏は待つこと多き日々であり

家中の電源抜きぬ雷の音

夏休学童保育門閉ざす

蛩草見上げてしまふ飛行機音

夏のリラ林の中の動物園

冠鶴柵仕切なき夏の原

常設のフェルメールひとり観てる夏

東 亜 未

長崎 桂子

早崎 泰江

森 理和

オリンピック二句

カラフルな中国衣裳宇宙も秋

極楽の竜の塔立つドームの秋

夏負けてスーブに利かすハーブかな

この塀に確か絡みし時計草



青蛙手のひら蹴って草へ跳ぶ

鎌倉喜久恵

ほかに〈枝蛙〉〈雨蛙〉ともいう。全長四・五センチ

くらい。垣の木の緑の中に動くもの、と見ると「青

蛙」である。つややかな背のみどり色、浅黄色の腹

側や四肢、近づくとケロケロ鳴くのを止める。抓む

ようにして枝から「手のひら」に移すと、少し冷た

くてむずむずする。やがて「手のひら」を蹴つても

との葉（木）へ跳んでいったのである。

「青蛙」に直に触れた皮膚感覚が、リアルに伝わっ

てくる佳句と思いました。

鉄錆びた昭和の団地さるすべり

篠田 純子

八月の中頃、昭和33年に建てられた日本住宅公団の初期の、いわゆる団地。“阿佐ヶ谷住宅”を見て歩いた。連日の暑さがウソのように、初秋らしい霧雨の降りかかる、散策には絶好の日和。道に近い2階建てテラスハウス二戸のほか、地上3〜4階建てを含めた三五〇戸は無人のようでした。芝生は伸び放題、何かものを尋ねようにも人影がない。

道の処々に「百日紅」があつて足下を染めていました。黄色い給水塔が不思議に鮮やかで「昭和の団地」の彩りになっていました。

合歓の花枕返しといふ謂れ

吉弘 恭子

ずっと以前親戚の大供子供と海水浴にいつて雑魚寝するとき、誰かが“北枕”といって騒ぎ出し、怖がり面白がつたりしたのを覚えてる。大人になって友達と雑魚寝のときも、気にする人はいた。「枕返し」

は死んだ人の枕を北向きにかえること、釈尊が涅槃のとき、頭北面西だったのにならったものだそうです。

星月夜髪とどのへてポストまで

芝 尚子

「ポスト」までの距離がさだかではありませんが、ふつうは“ちよつとそこまで”という感じですよ。夜でもあり、と思いましたが、近いからこそ見知り顔に会う可能性があるわけですね。いつもきちつと身仕舞をなさっている方なのだと思います。星明りの下、小柄な尚子さんが、われとわが身を慈しむようにポストまで行つてもどるのを、抒情的な一句に詠われたことへの敬意が湧いてきました。

おふくろの名の墓小さし萩の花

渡邊 友七

自身の母親を「おふくろ」と呼べる男性をかねがね羨ましく思っていました。“御袋”古くは尊敬語でもあったそうです。豆科の低木で種類も多いため、墓地の辺りにも咲くかもしれません。秋を代表

する草木なので草冠に秋と書いて萩と読ませたそうです。

終戦日喜怒哀楽の解放さる

安部 里子

当時はまだ小学生だったから、こうした人間関係の機微は解りませんでした。疎開先で、東京に残った家族や親戚の無事が分ったとき、「よかった、よかった」という大人達の顔を見て、何かから解放されたのだと感じたような気がします。が、開放という言葉を覚えたのはずっと後だった気もします。

ゲリラ豪雨と呼ばれしほどの秋出水 赤座 典子

すこし前の「ラジオ深夜便」で、その日は偶然ポーランドからの報告でしたが、この夏各地で局地的な集中豪雨による洪水があったとのことでした。「ゲリラ」はナポレオンのスペイン征服当時しばしば用いた。奇襲して敵を混乱させる小戦争のことだそうです。スペイン語。

お彼岸を過ぎて漸くひんやりした風が立ち。彼の国ポーランドが近くなった感じですよ。

妻欲しと妻が云ひきる秋うらら

遠藤 実

毎日の細かい家事のほか、お仕事を持つておられる奥さまと拝察しました。その奥さまが「わたしも奥さんがほしい」と呟いたのだと思われました。「云ひきる」、きつぱりした感じですね。云えば治まるのだと思います。

出囃子はどろどろどんと夏の寄席 木村茂登子

何代目かの、なくなった林家正蔵は、晩年こゑが震えることもあつて、怪談噺など、明かりを落して「どろどろどろ」だけで噺が始まる前から怖かった。小さい頃、そうした怪談や仕方噺の好きな叔父がいて、たまに来ると、「牡丹灯籠」など始めるのが怖くていやだった。

打水が撥ね会葬の花環かな

定梶じょう

東京の下町など、申し合わせて「打水」をしている様子をテレビで何度か見た。この夏の暑さは一通りではなかったで、ほんの僅かでも下がればいいと、初めて見たときより違和感はなかった。「会葬の花輪」に何度も打水が撥ねてかかってキラキラとうつくしい。

一人の卓トマトを添へてはなやぎぬ 芝宮須磨子

偶々お一人なのか、常にそうなのか分りませんが、夏野菜の彩りがいいですね。「トマト」は定番です。ハウス栽培で一年中出廻っていますが、季節の露地物がいちばんです。

雷鳴を遠くに聞きつ髪染める

須賀 敏子

初めて髪を染めたのはどのくらい前だったろう。当初は不自然なことに気がとがめて、内緒ごとのように仕舞湯で染めていたと思う。

中七までのことばに、そうしたニュアンスが感じられて、よくまとまった佳句。

サーファーの消えては現るる卯月波 鈴木多枝子

サーフボードを抱えて沖まで泳ぎ、寄せてくる波に乗ってボードを操りながら浜辺にもどる。

波乗が好きで海辺に転居する青年さえいるそうだ。ボードに乗った身体が消えてしまうくらいの高波がサーフィンに最適なのでしょう。

降りかけて逸れし夕立鴉くる

田中 藤穂

この夏局地的豪雨や崖崩れのあつたすこし前まで連日の早が続いた。雷が鳴ってパラパラときてもすぐ止んでしまった。馬の背を分けるような夕立にはならなかった。連日の猛暑に人も草木もかつえたように雨を待っていた。

折からとんできた鴉はと見れば、一雨くればいいという風でもなく枝に嘯いている。中七までの叙述

に対して唐突に見える「鴉くる」に俳諧的な味わいがあると思いました。

不可解は人居ぬ団地百日紅

東 亜 未

これも阿佐ヶ谷住宅のことだと思いました。

鉄筋コンクリート造りで、外見のこわれは見えませんが、内部の設備や配管などが劣化もしていると思われる。何よりも人影が見えず草木の伸びるにまかせてあるのが「不可解」に思えました。

大雨の窓に張付く蜥蜴の子

長崎 桂子

大雨で水が上がって、行き場のなくなった蜥蜴の子がガラス窓に張りついていて、内側から見ている感じである。蜥蜴はかわいいけど蛇は手足がないから怖いという人がいた。

蛇が出てきそうな草叢もぎらいらしかった。

地震の地に源氏蛭の飛ぶとやら

早崎 泰江

夏のはじめめ岩手宮城沖地震があつた。山間部なので個人家屋の損害は少なかったが、土石流で旅館が全壊し犠牲者が出ました。

局地的豪雨が頻発するので、山地が脆くなっているのだと思います。象徴的な「源氏蛭」。

蛭草見上げてしまふ飛行機音

森 理和

「カフェ・傳」のすてきな洋風庭園を見て廻っていて、草木の間に咲き出た「蛭草」に屈んだのだと思います。折から地を圧するような飛行機の爆音が通り過ぎて行つたのでしょうか。

カラフルな中国衣裳宇宙も秋

森山のりこ

一読、「北京オリンピックの再現のように、〃鳥の巣〃というドームが浮かびました。明りを落した中を金銀を身に付けた人々が吊り上げられ、宇宙を遊泳するかのようでした。赤をはじめ夜目にも鮮やかな色彩の洪水でした。

八月の句会

傳

中野区 カフェ傳

向日葵はみな俯いて地平線
思ひ出の中に姉あり百日紅
梅干の蓋ずれてゐる扇風機
老衰は桑さうに見ゆ窓に月
鰻重を待つてゐる間の冷酒かな
雨やみてたちまち蟬の木となれり
いくさ経し人ばかりなり心太
麦茶の香けふもよき口であるやうに
サングラス悪女の気分顎上げて
八朔や舟歌などを阿久悠忌
八月や糊のやうなるもの食べし
落蟬のしばらく歩きをたりけり
燕かたわれ星のなかでとぶ
ぜんまいの切れるごと蟬静まりぬ
裕子 恭子 典子 里子 綾子 尚子 喜久恵 茂登子 純子 喜孝 美代子 理和

調

さいたま市岸町公民館

休会

あを吟行会

阿佐ヶ谷住宅

新涼の川の芥に夏みかん

純子

猫じやらし揺れて涼しき風のなか
沼杉の実のまるまると秋深し
沼杉に丸き実たわわ雨涼し
古町の路次に噴出す夏のれん
吟行も小さき旅や青葉闇
空蟬や離れまいぞの形して
声かけて秋の蟬とる鴉二羽
人住まぬテラスハウスのカンナの黄
ひとつづつ散りていちめん百日紅
秋口の鴉の糞れるもの白き
弘子 綾子 尚子 里子 東亜未 喜久恵 喜孝 藤穂 典子 恭子

七座句会

中野区・小川苑

正確に岩叩きをり卯月波
立読の少年夏を甚振れる
雷雲や岩の蔭から泣き兎
民草は巖となるや敗戦忌
生身魂慌ててズボン穿きにけり
落日があやしく光り灼けるビル
憲法九条水盃といふお酒
眼前の秋の石より耳鳴す
水じつか貼り絵のやうに金魚群れ
白麦酒ゴルフボールの肉団子
転勤のたびの氏神秋まつり
多枝子 木枯 藤穂 夏子 純子 須磨子 恭子 喜孝 綾子 理和 寒林

連句勉強会 毎月第1日曜
希望者は 佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会 十一月九日
観蔵院 佐藤喜孝
(090-9828-4244)

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

(喜孝)

あを吟行会のお知らせ

吟行地 観蔵院 曼荼羅美術館

日時 11月9日(日) 午前11時

第2日曜日に変更、ご注意ください。

集合場所 観蔵院

交通 西武池袋線「練馬高野台」徒歩10分

「阿佐ヶ谷」から「石神井公園」行バス

「喜楽沼」下車3分

句会場 「田中家」(蕎麦屋) 3996-4440

申込み〆切 11月4日

申込先 佐藤喜孝 090-9828-4244

下記地図参照してください。



二〇〇八年十月号

発行日 十月二六日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト カット／恩田秋夫・松村美智子 佐藤喜孝 竹徳房

表紙・佐藤喜孝

郵便振替

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
00130-655526 (あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263